

「保守」ばやりである。某女史が首相になってからというもの、周囲に「保守」が増えたような気がする。筆者の周囲の人たちは、さまざまな分野で、警世家として発言を続けてきた人たちだからまだいい。自らの生活、文化、風俗を顧みない日本人が増えたことへの危機感を抱いてきた人たちなのだ。

別に某女史だからというより、政治の世界で「保守」勢力がにわか台頭してきたここ数年の気運に乗じてのことだろう。

しかし、現在社会に蔓延しつつある「保守」の風潮には賛同しかねることが多い。これは、日本だけでなく、欧米にもみられる社会への不満が高じた「排他主義」につながっているからだ。排他主義の行きつく先は紛争、戦争であることは歴史の先例として枚挙にいとまがない。知識人らは、某女史のふるまいを指して、こうした大衆の気運について理解が及んでいないと痛烈に批判する。



毎日のようにマスコミをにぎわす『保守』の二文字

こうした行為を批判してきた前首相は、リベラルのレッテルを張られ、反国家的のように評されるのみれば、その裏返しとして、「保守」に名を借りた歪んだ社会的な気運が蔓延しつつあるということなのだろう。その気運が、国民の間に「分断」を生み、社会を破壊しかねない「反保守」であろうことには考えが及びもしない。

それでは、「保守」とはいったい何なのか。辞書の表記だと、「旧来の風習・伝統を重んじ、それを保存しようとする事」。この言葉の重きは後半の「保存しようとする事」にある。

しかし、社会に蔓延している自称「保守」たちは、日本特有の風土である自然災害や、地政学的な国際的リスクから社会を守ろうと行動を起こすわけではない。むしろ、自らは何もせず他人まかせで、それゆえに、よりかかる存在を探しさまよっているだけなのだ。それが、現在の「保守化気運」であり、その正体を知ってか知らずか、利用している人物がリーダーに名乗りを上げているのだ。という解釈の上にたってみれば、ここ数年の「政治的騒動」は歴史の分岐点になる可能性はなくはない。そうはなってほしくはないのだが。

(令和8年1月)